

研究機関名：東北大学

1.受付番号	2024-009
2.研究課題名	2 言語併用児童の心内辞書構築と自己意識の関係
3.研究期間	令和 5 年 2 月（倫理審査委員会承認後）～ 令和 6 年 12 月 31 日
4.研究の概要	意義・目的（研究の背景・目的や倫理的項目についての確に記すこと。） 子どもが言語機能を発達させていくためには、安全で守られている豊かな土壌が重要である。だが、外国にいて多文化の中に浸潤され、母語（first language, L1）と第二言語（second language, L2）を同時に習得している外国籍児童がどのように言語能力を確立できるかを考えると、両言語間の相違点や言語運用による認知活動のあり方や、社会環境の中で獲得された文化的自己観による影響が複雑に影響し問題が生じることも少なくない（Paradis, 2011）。日本でも外国出身の児童は 9 万人を超え（文部科学省, 2019）、各地で言語教育や現地での生活に慣れるための支援活動が行われているが、子どもの言語習得に及ぼす環境や認知的発達との関連を示す実証的な知見はほとんど得られていない。 日本語は漢字と仮名が混在している希少言語であるため、身につけるためには高い認知能力が必要とされている。とりわけ中国語を母語とする日本語学習者は、L1 の知識を活用して日中両言語間で意味が一致する表現を容易に処理できるが、漢字と仮名を併用する和語の認知処理が弱いことが指摘されている（Tamaoka, 1997）。中日 2 言語を併用する子どもの場合、言語間・文化間転移の時期と子どもの L1 と L2 同時習得にとって重要な時期とが重なっているため（稲田 他, 2014）、両言語の適切な語彙処理能力を身に着けるまでには、成人学習者以上の混乱や困難を経験するかもしれない。 そこで、本研究では、行動実験、神経心理検査及びアンケート調査を行い、日本在住の中国語を母語とする中日 2 言語併用児童による中国語（L1）と日本語（L2）の認知処理過程を解明し、その処理過程に影響する語種の特性、個人の認知機能及び社会文化的な要因を検討する。第二言語環境に置かれている外国籍児童が複雑な環境における発達途上で経験する困難や葛藤を解決する一助となり、多様な個性を尊重する適切かつ効率的な 2 言語教育法の確立に貢献することを目指す。 対象者 日本に在住する中国人児童及び保護者である。地域の団体・NPO 組織などを通じて公募する予定である。 1. 予備実験 中国語を母語とする健常な児童（年齢：10 歳～14 歳）を 10 名程度募集する予定である。 2. 本実験 <u>予備実験に参加しない</u>中国語を母語とする健常な児童（年齢：10 歳～14 歳）を 60 名程度募集する予定である。

	なお、「健常」とみなす要件は、下記 2 点すべてに該当し、心身ともにいずれも支障がないことである。 ① 現在、医療機関で治療中の心身の疾患がない ② 学校で通常の学級に通学しそこでの学習や活動にとくに支障がない 実験参加者児童及び保護者に事前の十分な説明を行った上で自由意志での協力を求める。ただし、新型コロナウイルス感染防止のため、2 週間以内に、海外渡航歴があり、または県外移動歴がある方は本実験対象外とする。 問い合わせ・苦情等の窓口（講座・研究室の連絡先を記入し、研究者の個人名は記入しないこと） 東北大学大学院文学研究科言語学研究室（022-795-5983） 東北大学川内南地区「人を対象とした医学系研究」 倫理審査委員会事務局（022-795-6103）
--	--

（紙面が不足するときには、罫線の縦幅を任意に増やし、次頁送りにしてください。）